

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL.58



松山市釣島灯台

特 ローカルに生きる 集

—地域の「お宝」を活かして—

- 近代産業遺産という新たな鉱脈を掘る!
- 大島石を使ったヒット商品を狙って!
- 村芝居・村祭の復活
- 藩政時代の庄屋屋敷『土居家』復元
- 歴史のロマンあふれる中世の山城・河後森城

■ 論 談

松山大学教授 村上 克美

■ キラリ光るまち

岡山県 落合町

好評連載

★ 歩キ目デス&足ラテス

岡崎 直司

アングル

ヒューマン・チェーン (人間の心の鎖) を・・・! 南海放送アナウンサー・みかん一座座長／戒田 節子 1

◎『ローカルに生きる』

一地域の「お宝」を活かして—

- 近代産業遺産という新たな鉱脈を掘る! 新居浜市／森賀 盾雄 2
 大島石を使ったヒット商品を狙って! 宮 窪 町／矢野 昌孝 4
 村芝居・村祭の復活 重 信 町／丹生谷 衛 6
 藩政時代の庄屋屋敷『土居家』復元 野 村 町／井上 謙二 8
 歴史のロマンあふれる中世の山城・河後森城 松 野 町／高山 剛 10

論 談

経済のグローバル化をめぐる 松山大学経済学部教授／村上 克美 12

キラリ光るまち

楽しい町にしようか 岡山県落合町／青木 信治 16

リレーでちょっとトーク

- ふるさとへ 松 山 市／田名後高広 18
 何でも話せる青年団 大 洲 市／都築 藤子 19

いきいきグループ紹介

何でもやっちゃう ゆげ女性塾 弓 削 町／村上 律子 20

研究員レポート

- 物語づくりはこつこつと 伊 方 町／稲田 紹 22
 地域自治の充実を求めて 伊手 博志 24

MY TOWN うおっちゃんぐ

歩キ目デス&足ラテス 岡崎 直司 26

Information

- 媛のくにフラッシュ 〈八幡浜市・野村町〉 28
 お知らせコーナー 29

特集「ローカルに生きる」 今号のテーマ

地域の「お宝」を 活かして

それぞれの地域には、独自の歴史、文化、産業等がしっかりと根づいております。

それらは、近隣のものと一見似ているように見えても、それぞれオリジナリティーがあります。

私達は、つい新しいものに目がゆき、直ぐに飛びついてきた傾向があります。

しかし、私達が住んでいる地域をもう一度よく見回してみると、今まで何となく見過ごしてきたものの中に、「おやつ!これは!」と思うものがあるはずです。

これこそ磨けばやがて、光り輝く地域の「お宝」ではないでしょうか。

(編集子 小)

表紙の言葉

松山市の企画、「釣島サンセットツアー」に参加しました。

三津浜港からたった五キロ沖の小さな島。明治六年に灯台が初めて点灯した。英国の技術で建築された、石積の宿舎など現在修復されて、立派な別荘のようである。

沖の向いには中島の島々が見える。その間を往来する船の多さ、種類に、又別の世界を見ました。

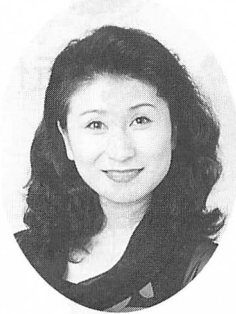
柳原 あや子



ヒューマン・チェーン (人間の心の鎖) を…!

南海放送アナウンサー・みかん一座座長

戒田 節子



「ヒューマン・チェーン」この言葉と私が初めて出会ったのは、十四歳の時でした。ある青春小説の一シーンに、「海でおぼれている人を助けるために、囲りにいた人達が、次々と手をつなぎあい、ヒューマン・チェーン（人間の鎖）を作り、その人の命を救った。」という話がありました。私は、その光景を目に浮かべ

た時、一列にしっかりとつながった人の鎖を、力強く、美しく、そしてまぶしくさえ感じたがありませんでした。その時から、ヒューマン・チェーンという言葉が、私の心に深く刻まれたのです。そして、人と人の鎖の輪を広げることができたらしと、多感で純粹だった少女の私は、夢見るようになりました。

その後、年を重ね、世の中が少しずつ見えてくると、形こそ手はつないでいても、そこに心が存在しないという、淋しい現実にもぶつかることもありました。逆に、ひとつの目標に向かって、熱い心を持った者同志が手をつないだ時思いもよらなかったような結果が生まれるという事も経験しました。

そのひとつに、みかん一座の活動があります。

みかん一座は、愛媛のシンボル「みかん」と「未完成」

をかけてつけた名前です。そして、合言葉は「サンシャイン・アイズ」輝け瞳！どんな時も希望を捨てず、輝く瞳を持って生きてゆこう！そんな願いが込められています。昭和五十九年に結成して以来、十四年間、多くのオリジナルミュージカルを上演してきました。特に故郷をテーマにした作品が多く、地元の人達が世代を越えて手をつなぎあい、ミュージカルを通して町づくりに取り組んできました。

ひとつの舞台を作り上げるためには、大勢が何ヶ月もいっしょになって走って行かなくてはなりません。芝居や歌やダンスに汗を流す役者達。大道具や小道具、衣装作りに精を出すスタッフ達。舞台の幕を開けるといふ夢に向かって、一生懸命です。でも、みんな、仕事や家庭、学校、友達などの、いろんな悩みや苦しみを抱えながらの作業：走って行く中で、息切れして

たおれそうになることもあります。そんな時、仲間がそつと手をさしのべ「この手のぬくもりがある限り、君は決して一人じゃないんだ！」と励まし、助け合うことによって再び走り出すことができるのです。

鉄の鎖なら、一個の輪がほろほろになり、はずれるとそこでぶつ切り切れてしまします。でも、人の鎖は、友情や愛、勇気、信頼などのあたたかい心によって、より一層固く結び合うことができる：そう感じるたびに、「ヒューマン・チェーンが人の命を救った」という、あのシーンを思い出します。

近代産業遺産という

新たな鉱脈を掘る！

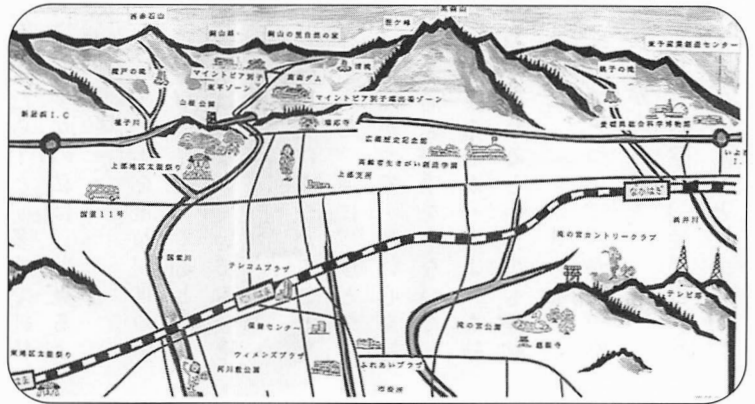
銅夢物語・新居浜市民会議

森 賀 盾 雄



無尽蔵の地域資源

五年前に市民会議を設立した頃はもう少し簡単に向こう



別子銅山が閉山して、「既にか二十五年の月日が流れた。鉱山まちというのは通常辺鄙なところであり、これまた通常は閉山と共に直ちに鉱山観光なるものが登場しているが、新居浜のマイントピア別子がオープンしたのは閉山後十九年目であった。

戦前戦後の長い年月をかけて地方素材供給工業都市の市民意識は、一方では中央マスメディアのシャワーの中でただひたすらに東京、大阪を目指す都市化に合わせた上昇意識と、地域内向けとしてケンカ祭りに収れんする閉鎖的なムラ意識に純化されていた。三百年にわたる近代産業遺産のまちづくりは、無数の人的、技術的、建物的、関連交流的遺産をして、無数の物語を語らしめることであり、先の純化固定化された非創造的意識のバリアーを打ち破っていく糧ではなからうか。

楽しみながら進む

銅夢物語

ポケットパークへのブロンズ像の設置、公共建築物への銅板屋根の採用、旧住友鉄道跡の自転車歩行者専用道化、マイントピア別子のオープンなど、ハード先行で進んでいた行政の取組み。新居浜青年会議所の、「銅（懂）景のまちづくり提言」、美術研究家達の「銅のかたち展の開催」、「西洋式銅板クラフトの普及」など、ソフト先行で進んでいた市民



旧水力発電所

運動。それらがバラバラに自然発生的に進められていた状況を受け六年前に市内有志十数名で「銅を生かしたまちづくり研究会」を作り、一年間かけて「銅夢物語・新居浜」という総合的提言書をまとめた。直ちにその提言を実行する市民団体「銅夢物語・新居浜市民会議」を設立。以来、

銅（あかがね）INマイントピア別子の開催、めざせ！銅山史と自然の学習ランドフォラムの開催、銅工芸教室の開催、銅（あかがね）文化祭典の開催、別子銅山の近代化のために雇われたルイ・ラロックや民間最初の留学生・塩野門之介の足跡を調査するためフランスへの調査員派遣など五年間はめまぐるしく展開していった。この間には国立科学博物館や諸大学の産業史、産業技術史、産業考古学、近代建築学の先生方数十名が市民会議との交流の中で来市され、また他の銅山史のまちの関係者との交流も積み重ねられた。

新居浜の産業遺産を絶賛する市外の専門家達。足下の産業遺産に無とんちやくな市民。この落差を一步でも二歩でも埋めなければと考える市民会議。スクラップアンドビルドで走り続けたまちはなかなかです。しかし閉山して、まだ“二十五年。あせるなかれ、です。

いよいよ行政も

本格的取り組みへ

昨年の市政運営方針に重点課題として「近代産業遺産のロマンの息づくまちづくり」が登場。一昨年には市が「近代産業遺産・銅の道活用調査事業」を実施。時同じくして（財）余暇開発センターが新居浜をモデルとして「遊脈づくり調査」を実施し、その中で歴史的に劣化した静脈空間を遊脈化するということで、“近代産業遺産を活用したツーリズム”を全国で初めて提言してくれた。

今年九月四日には近代産業遺産活用全国研究会（望月照彦座長）を本市で開催していただいた。学ぶ、遊ぶ、感じる近代産業遺産活用モデル都市新居浜へ向けた本格的始まりの時が来た。

マイントピア別子端出場地区には明治四十五年に建てられた赤レンガの旧水力発電所跡がたたずんでいる。中には一九一〇年製ドイツ・ジー

メンス社の発電機とベルトン水車が圧倒的迫力で鎮座している。

昨年四月には別子銅山初代総理事・広瀬宰平邸宅の修復と広瀬歴史記念館が建設オープンをした。海拔〇メートルから千二百メートルの標高差の中に近代産業遺産が点在する新居浜。しかも海辺の工場地帯では世界最先端の技術が展開している新居浜。何年前か、総合研究開発機構理事長の星野進保氏に“生きた産業博

物館都市”という言葉を聞いた。

今後においては、これら近代産業遺産をネットワーク化し、様々なコース設定を行ったり、語り部の確保をしながら、日本の観光概念の変革を見越して、市民会議を含む豊かな人的ネットワークの拡大の中、過去と未来の鉱脈掘りの楽しみが続いて行く。



新居浜学夏季セミナーで煙突山を見学（平成10年8月）

大島石を使った ヒット商品を狙って!

宮窪石彫サークル会長 矢野 昌孝

石彫サークルの活動

宮窪町は花崗岩「大島石」の産地である。四年前に町の大事業として大島石を活用した石文化運動公園を完成させた。採れば無くなる自然の贈り物「大島石」が採れた証として巨大な石のモニユメント

ローカルに生きる―地域の「お宝」を活かして―

が誕生したのである。そして、施設と共に石彫サークルが育つて来ている。現在活動六年、会員二十二名と成長し、通称「石公園」を核に石の情報発信を行っている。

はじめは趣味の会として楽しんでいた。それが技術が上がりと共に作品が商品として売れ出したのである。このことで会員への期待が高まり、町外の福祉施設から彫刻の依頼が来た。趣味の会とすれば売ることには抵抗があり、共同制作でモニユメントを完成させ寄付をしたのである。

会員は、当初自作品を売る考えはなかったが、売れ出したことで地域の要望もあって、産出される大島石の九割に当たる「廃石に息吹を」と自然の石模様（ナデ・帯等）を生かした作品に取り組んできた。その中で水盤・蛙・ヒラメ・茶わん・石外燈等の作品多数が人気を呼んでいる。

石工房完成で 趣味から産業へ

そして今年活動六年目にし、て念願の石工房が完成した。この石工房は、グレーン・切

削機・研磨機等

が備わった施設

である。今までは

サンダーを主に

に使って行っていた

が、施設ができたことで便

利になった。その

の反面使用料を町

に納めなければ

ならないので

ある。このことで収益性を考

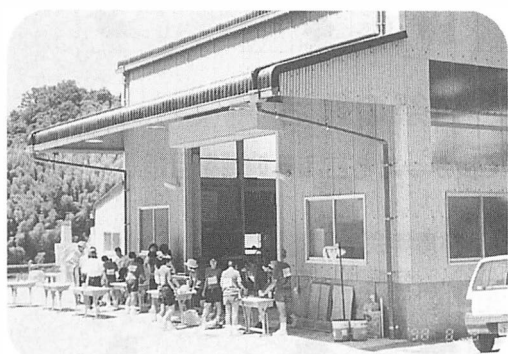
えなければならぬ結果となった。今までも消耗品は収益や会費で賄っていたが、施設の存在価値を問われることもあって、趣味から産業への取り組みを図るときになったようだ。

石工房ができたことで、地域の小・中学生が多数体験実習に訪れ、会員が石の制作指導にあたっている。

また、しまなみ海道開通記念イベントの「もののふ像」（等身大）二体の注文依頼が来ており会員は多忙を極めてい



石短冊制作作業（右が矢野さん）



「石工房みやくぼ」で作品制作中の生徒たち

会員はそれぞれが仕事をもっており、空き時間での対応で地域の期待に添うのは問題が多々出てきている。それは施設を使用するものと管理（行政）との考えの違いや趣味から収益を上げる方法論がいまだ決まったようでハッキリしてないからである。これも他に例がないことから時代の先駆者として自ら成功事例を創って頑張らなければならぬ。

ているサークルの作業を役割分担で取り組み、効率を図りたいと考えている。彫刻班・工芸班・ヒット商品制作班等に分かれて作業をすれば進捗が良くなると思われる。せっかく石工房ができたのだから大いに活用して新しい産業への起爆材にしたいものである。

「石短冊掛け」を ヒット商品に

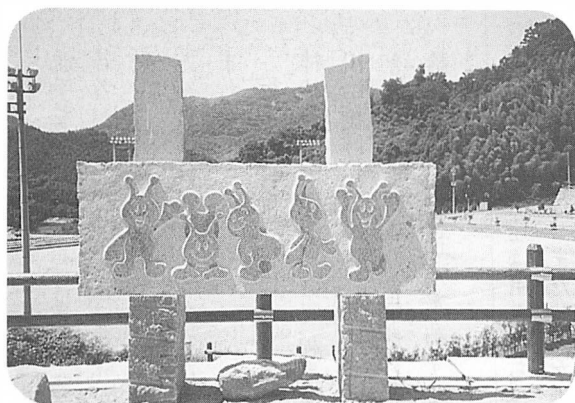
また狙う期待のヒット商品であるが会員が知恵を出し合い第一作を決めた。それは「石短冊掛け」。これは俳句大國愛媛と共に売り出したいと思つてのことである。また、わが町は能島水軍文化の里に指定されており、海賊衆が詠んだ万句連歌は有名である。河野家出の一遍上人がもたらしたという連歌は三百年続き、時代を経て俳句へと変わり正岡子規で有名になつてゐる。このイメージを生かして「石と連歌↓俳句」の組み合わせができないものであろうか。

それには「石短冊掛け」だけではものたらないことは分かつてゐる。俳句愛好者のニーズに答えるために直接石短冊に彫り込める。また庭石等にマイ俳句（自分の創つた）を彫り込み適当な単価で提供できることが必要と考えている。この三段階の供給を考えて底辺になる簡単な「石短冊掛け」がヒット商品にならないであらうかとの読みである。

「石短冊掛け」は大島石の磨き石を使用し大きさ10センチ×48センチとサイズを合わせて作成し、箱に入れ表装紙に包んで仕上げとする。表装紙は宇宙の色・花崗岩の大島石色・地中マグマの色で構成し会員が創つた「炎天の 宇宙の記憶 残る石」をデザインとして印刷して入れる。

あとはいかに宣伝して売るかである。タイミング良く瀬戸内海大橋開通記念イベントで俳句大会を行ない愛媛の特徴を出そうとして

いる。できればこの機会を大いに活用したいものである。俳句会の参加者に石短冊掛けを記念品として提供しPRを図りたい。そして売店会場では石短冊掛け・短冊石・記念碑を売り、大島石のイメージを俳句と結ばせたいと思つてゐる。このヒット商品を狙つた第一作の販売は会員のこれまでの英知が試されるときなのである。



会員作製の石板レリーフ「しまなみキララ」

村芝居・村祭の復活

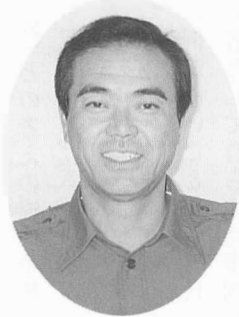
住んでいて良かったと言える地域を目指して

下林青年会

会長

丹生谷

衛



地域の変貌

私たちの下林地区は重信町を縦断する重信川の南、県立



自然公園「皿が嶺」の麓に位置し、気候は温暖で古くから米麦の生産を中心とした専業農家の多い地域でしたが、近年は米価の下落や減反、社会構造等の変革から後継ぎのほとんどが近隣の企業に勤務しており、農繁期以外は主に六〇歳以上の方々が田畑のお世話をしております。

後継者も結婚し、子供が小学校に入学する頃までは松山市等で生活。その後、帰郷する場合が多く、多分に漏れず高齢化や少子化などの問題を抱

えている地域でもあります。また、昭和四十年ころまでは地域のほとんどが農業を営み、仕事を共有する部分が多く、相互扶助の精神があらゆる部分で色濃く残っておりましたが、近年は勤め先も様々でライフスタイルが家庭や仕事中心となり伝統行事や作業奉仕等は敬遠されがちとなり、故郷の良き風習が消えつつありました。

はじめは秋祭の復興

丁度そのころ、獅子舞保存会という七〜八人の組織があり、獅子舞の後継者も増えないう、このままでは衰退する一方である。何とか秋祭だけでも復興しようとの話になり、当時二〇代から四〇代の人に話を持ちかけ、自覚をもっていただくために活動費は草刈り等の作業の請け負い、収入を当てるなど自主運営を基本とし、祭りの法被も以前は支給されていたものを自費で購入。デザインも当時の二〇代



舞台挨拶・大利根月夜 (H6.7.23)

行事内容も次第に充実させ、神社の伝承から、宮司が重信川に投げ込む御神体を少年式を迎える十四歳の少年たちが拾い上げ、神社に奉納する「宮流し」

に選考を依頼。私達には少し派手なところもありましたが、若者が参加しなくては意味がないとの考えから四〇代の方々には我慢をしていただきました。

主婦や子供達は主人たちへの憂さ晴らし、また若い女性

ぎ夫に水をかける「神水掛け」
見物者にうどんを振る舞う
など多彩となり、会員数も一
〇〇世帯で七〇数名となりました。

村芝居復活に向けて

そのような経緯のなかで地
域の高齢者から、昔は夏祭り
などで若者が芝居を演じ、沢
山の見物人でにぎわったとの
話を聞き、夏の「輪越し」の
時期に合わせ復活してみよう
との話が持ち上がりました。

でも何分にも未経験の分野で
あり、当時は各地に芝居の振
り付けや指導者がおられたそ
うですが、今は亡くなられて
おり、まず指導者探しから始
めました。幸い役者の経験者
が松山市におられ演技指導を
受けることになりました。

しかし、昼間は会社勤めをし
ていることや田植の時期と重
なるため、練習予定時間にな
っても二、三人。台本の読み
合わせも相手が不在で代役で
行う。台詞を覚えるために車

の座席に台本を置き、信号で
止まる度に口をパクパク。入
浴中に大声で練習し、近所か
ら気味悪がられる。

また練習に熱が入り、慰労
会なども含め午前様になるこ
とが多く、既婚者は母子家庭
と言われるなど、苦勞もあり
ましたが、老人たちが練習に
地酒を手に訪れ、アドバイス
をいただく等の楽しい交流の
場でもありました。

平成二年以来、毎年七月の
下旬に上演をしており、今で
は夜店も出る等、多くの方に



関の弥太兵 (H9.7.20)

楽しんでいただく夏の行事と
なっております。

役者の新旧交代や貸衣装、
かつら等の経費などの諸問題
もありますが、関係者が最も
心に強く感じたものは、新し
い自分を発見したことだと思
います。

演技というのは一般の社会
生活では味わう事のない領域
です。(一部あるかな?) だれ
も知りえなかった演技力とい
う分野。

普段はおとなしいが役者顔
負けに上手な人。

スポーツ万能だけれど照れ
臭くて恥じらう人。

管理職であり、いつもすま
しているのに女形がバツゲン
にうまい人など。

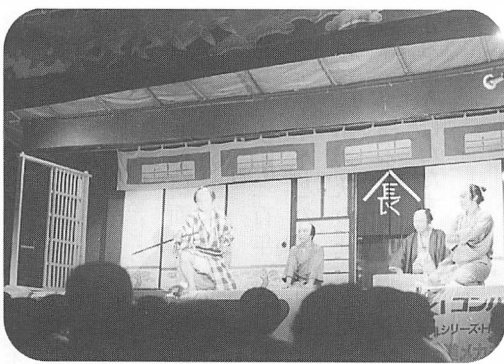
隠れていた能力を周囲や本
人も認め合い、親しいお付き
合いの輪がひろがりました。

農機具メーカーに勤務する
者は営業に出ると「あんだ芝
居やりよる人じゃろ」と声を
かけられ信用度が増し、仕事
がやり易くなった。役所の方

も顔見知りが多くなり、苦情
処理が以前より楽になったと
話しています。

祭や芝居で培った人の輪が
少しづつ膨らみ、大きなクリ
スマス・ツリー作りとなつた
り、県道の周囲に花を植える
などにも発展しております。

皆さんが期待や郷愁として
心に残っている古里に少しづ
つ近づける様に、会員一人一
人がわずかの時間と手間を出
し合い、皆が住んでいてよか
ったと言える地域を目指した
いと思っています。

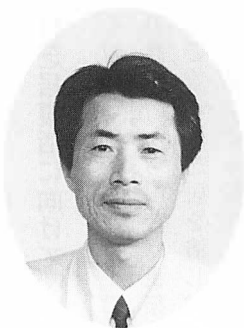


“熱演” 森の石松 (H10.7.19)

藩政時代の庄屋屋敷

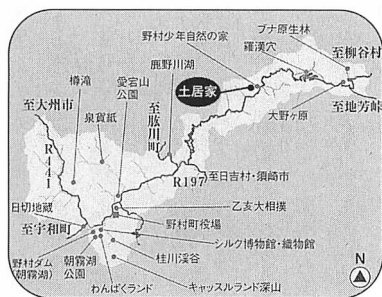
『土居家』復元

野村町役場企画調整課 井上 謙二



惣川地区

ブナの自然林と酪農開拓で知られる四国カルスト・大野



ローカルに生きる―地域の「お宝」を活かして―

ヶ原高原のふもとに、「惣川地区」が広がっている。三百八十戸、約九百人が暮らすこの山里は、かつて土佐と伊予を結ぶ街道の村として町で最も栄えた歴史を持つ「国境」の村である。

昭和三十年の町村合併時には三千六百人が住んでいたこの地区も、過疎・高齢化の波が押し寄せ、高齢化率は四十三・二%と町全体の二十八・五%を大幅に上回り、もはや二人に一人が六十五歳以上といえる状況で、若者の減少とともに、地域の活力どころか「生活」そのものの存続さえ危ぶまれるところまできている。

土居家

土居家は、藩政時代の十代にわたり庄屋を勤めた家柄で、その住居である母屋は、文政十年（一八二七年）に建築されたものと伝えられる。

この家の特徴は、建物と部材の大きさにある。間口十二間（二十五m）、奥行が五・五間（十一m）、棟までの高さ十三mと、「茅葺き木造民家」としては西日本でも有数の規模と評され、その茅葺きの大屋根は巨大な壁のようにさえ見える。

大黒柱の最上部で家を貫いて横たわる牛木は二十mもの一本の巨木が使われており、大屋根を構成するため南面に突き出た「せがい」づくり、宇和島藩のお抱え絵師の手によるといわれるふすま絵、一畳ほどもある一枚板の欄間など、当時の山村の民家としては稀な特徴的なものが多く残されている。

離れは、明治期の建築で、

金閣寺を模したといわれる茶室風の建物で、戸袋の鏤絵や、欄間、床の間などに、当時の主人の風流心が感じられる。屋敷の北側斜面には「屋敷林」としての自然林が残されており、樹齢二百年ともいわれるケヤキなどの広葉樹林は、春の新緑から秋の紅葉と四季折々の表情をみせ、土居家を守るようにたたずんでいる。



復元された「土居家」

修復への歩み

建築後七十年の年月を経て、屋根をはじめ全面的に傷みがひどくなり、個人の手では修復も不可能な状態となったことから、平成七、九年度において全面的に修復を行うこととなった。

修復にあたり重視したのは「可能な限り創建時に近い形で残す」ということである。

時代を経て何度も増改築された建物から、建設初期の建物の姿を考証する作業は、具体的な資料も乏しく、解体してはじめて発見される形跡もあるなど、工事・工程との競争の中で大変あわただしい作業となった。今となつては、さらに十分な検証が必要であつたようにも感じている。

また、現存の姿を残すため解体・新築することを避け、「既存住宅の修理」の方法をとつたため、建物全体をジャッキアップして基礎部分の修繕を行うなど、施工業者も経験

がない難工事となった。

行政サイドにも建築文化財復元の経験がなく、事前の調査研究や修復コンセプト等にも難行を重ね、ひたすら動きながら考え、やみくもに走り続けた三年間であつた。

地域の宝として

一方では、地域の人々の、土居家を「地域の宝」として残そうという熱意の輪が次第に大きくなり、茅一万五千束すべてが三年がかりで地域の皆さんの手で刈り集められ、屋根の解体や屋根葺き作業も地域住民の手によって実施されたことは、土居家が「地域の誇り」としていつまでも人々の心に残ることにつながつたものと感謝している。

土居家の運営・管理にも地域の婦人の皆さんの積極的な参加をいただいているとともに、周辺地域では、住民の手による茅葺き茶堂の新築や公園づくりが進むなど、「地域資源の見直し」と「惣川らしさ

の創出」に向けた意識は着実に広がりつつある。

土居家の活用

土居家を今後の地域づくりに活かすためには、これを単なる観光施設にすることなく、「惣川で生きることのすばらしさ」、いわゆる「農村の良さ」を表わす象徴的な存在として、更により良い「農村集落・惣川」づくりを進めることが重要である。

このためには、惣川地域の良さを理解していただく「惣川のファン」づくりと、こうした人々と地域の皆さんが親しく心のこもった交流を続けることが大切であり、その経験の中から、明日の惣川づくりの道が開けるものと確信している。

従つて、この家を単なる見学施設として保存するのではなく「使いながら残そう」ということで、宿泊・交流会場としても幅広く活用を図ることになっている。



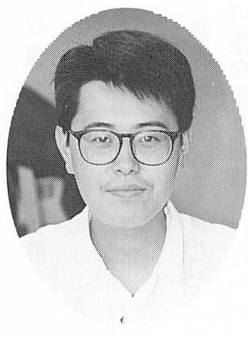
「離れ」は宿泊施設としても利用される

明治維新から百三十年、第二次世界大戦から五十年、私たちは今、これらの時代に劣らない大きな変革の時代にある。百七十年もの間、これらの時代と地域を見続けた土居家の前に立つとき、過去の人々の生きざまと今を生きる私たちの生き方、そしてこの地域の将来の「あるべき姿」について深く考えさせられる。土居家の意義は、まさにこの点にあるように思われる。

茅葺き民家交流館「土居家」
☎（〇八九四）七六―〇六三六

歴史のロマンあふれる 中世の山城・河後森城

松野町教育委員会 高山 剛



町内初の国指定史跡誕生

昨年の九月十一日は、松野町にとって記念すべき一日と

なりました。大字松丸から富岡に渡って広がる河後森城跡の内、約二十万平方メートルが国の史跡指定を受けたのです。愛媛県内では、実に十八年ぶり八度目の史跡指定であり、もちろん、松野町では初めての快挙となったのです。

中世の城・河後森城

河後森城は中世、特にその中でも後半段階の十五世紀から十六世紀に最も機能していた山城です。ちょうどそのころは、戦国時代という混乱の時代ですから、日本各地で城造りが盛んに行われていました。その中で、河後森城は、伊予と土佐の国境に位置し、双方の境界を分かち「境目の城」として、長期に渡って機能していたと考えられています。ところがその一方で、河後森城に関する当時の古文書は、江戸時代の記録はともかくとして、ほとんど見つからない状態です。そこで、松野町では、考古学の方法か

ら、河後森城の歴史を解明しようと発掘調査に着手したのです。

河後森城の発掘調査

古くから地域の人々に「城の山」と呼ばれ、親しまれていた河後森城ではありましたが、その実体に関しては、先述のとおり不明瞭なものでした。しかし、昭和五十九年度から六十一年度に行われた愛媛県による中世城館跡分布調査で遺跡と認定され、またその後も、昭和六十三年度から三年間に渡って行われた町内遺跡群細分布調査の発掘によって、遺構や遺物を確認したのです。その後は、平成三年度から本格的な発掘調査を継続して行っており、徐々にその全容が明らかになってきました。

河後森城の遺構と遺物

皆さんがよく目にするお城といえば、やはり、松山城や宇和島城といった近世の城だ

と思いますが、河後森城は、それよりも古い形態を残した山城です。山の頂上部には、曲輪と呼ばれる人工的な削平地が階段状に連なり、それを取り囲む斜面は、実に急峻な地形を呈しています。また、岩盤を凹状に掘って敵の侵入を阻止したと考えられる堀切や堅堀も存在していました。ここでお気づきかもしれませんが、実は河後森城には石垣がほとんど残っていません。城の出入口である虎口に、一部石積みとも言えるべきものが



柱穴跡（西第十曲輪）

経済のグローバル化をめぐって

松山大学経済学部教授

村上 克美



一、歴史的転換

現代の日本は、二十一世紀

を目前にして様々な意味で大転換に直面している。すべての産業や機能を国内に一定レベル以上保有するというフルセット型産業構造の崩壊（産業空洞化）、国内市場を中心とする価格形成メカニズムの破綻（価格破壊）、生保・銀行・証券の連鎖崩壊（金融大破綻）などに示されているように、特に目立つのが従来の経済基盤の変質あるいは崩壊である。このため、ほとんどの産業で付加価値が増加し、大企業も中小企業も売上高を伸ばすという右肩上がりの成長が不可能となった。「明日は今日より豊かだ」という常識は幻想となり、日本経済は「うつむき加減の時代」に入った（堺屋太一「大変」な時代」講談社、九十五年）。「当面する日本の不況も、また単に『国民経済』の枠組み内で発生する在来型の景気循環の一局面であるにとどまらず、『国民経済』の枠組みの一角を打破し、新しいトランスナショナルな経済的枠組みを志向する金融の自由化によっ

てもたらされたバブル発生・膨張と崩壊を契機とする不況であるという意味において、まさに「複合不況」と呼ぶに値する」（宮崎義

一「国民経済の黄昏」朝日選書、九十五年）といわれるように、複合不況の発生という意味でも「国民経済」としての日本型システム

表1 主要経済指標（全国）

年 月	実質GDP 伸率 前年比%	名目GDP 季節調整値 兆円	鉱工業生産 前年比%	機械受注 民需、除く 船舶・電力 前年比%	新設住宅 着工戸数 前年比%	家計消費支出 勤労者世帯、 実質 前年比 %	大型小売店 販売額 前年比%	有効求人 倍率 倍
1994年度	0.6	478.8	3.2	4.1	3.4	▲0.8	▲2.1	0.64
95年度	2.8	489.2	2.1	8.5	▲4.9	0.4	▲1.0	0.64
96年度	3.2	503.1	3.4	11.4	9.8	0.9	0.3	0.72
97年度	▲0.7	504.6	1.2	▲3.9	▲17.7	▲2.3	▲4.5	0.69
1997年5月	▲2.8	502.7	6.5	8.8	▲9.6	▲1.5	▲3.3	0.73
6月	(4~6月)	(4~6月)	6.8	5.6	▲11.6	▲5.8	▲4.0	0.73
7月			4.1	0.3	▲27.8	3.4	▲1.9	0.73
8月	0.8	508.1	3.3	2.7	▲17.5	▲0.3	▲0.5	0.73
9月			4.1	1.3	▲22.2	2.5	▲2.3	0.72
10月			1.6	▲14.3	▲25.2	▲0.1	▲2.3	0.70
11月	▲0.4	504.4	▲2.7	▲16.6	▲23.5	▲2.2	▲2.5	0.69
12月			▲0.9	▲8.9	▲18.6	▲4.6	▲4.3	0.67
1998年1月			▲2.6	▲4.7	▲16.3	▲5.9	▲2.9	0.64
2月	▲1.3	502.9	▲3.9	▲17.9	▲13.6	▲4.3	▲5.3	0.61
3月			▲5.1	1.4	▲11.9	▲5.7	▲14.9	0.58
4月			▲6.7	▲17.8	▲16.1	▲0.5	3.9	0.55
5月	▲0.8	—	▲11.2	▲28.6	▲17.0	0.2	▲0.9	0.53
6月			▲7.9	—	▲11.7	—	▲4.8	0.51

（出所）「エコノミスト」1998年8月25日など。

（注） 原資料：経済企画庁、通産省など。

は崩壊に向かっている。

その結果、日本経済は低成長からゼロ成長へとシフトし、さらに九十七年度には、実質GDP伸率（対前年比）が第一次石油ショック以来二十三年ぶりにマイナス（〇・七%減少）に転落することになった。個人消費の大幅な落ち込みや設備投資の低迷を反映して、機械受注、新設住宅着工戸数、大型小売店販売額などの九十八年一月以降の伸率も同様にマイナスである（表1参照）。「国民所得統計速報」（経済企画庁）によると、九十八年四―六月の実質GDP伸率も三・四半期連続の減少（―三月期に比べて〇・八%減）となり、九十八年度もマイナス成長となる可能性が高まった。東洋経済「会社四季報」（九十八年）の最新決算予想によれば、金融を除く事業会社二千八百五十三社の九十八年一―十二月期（全決算期ベース）の実績見込みは、前年の八・一%経常増益から三・八%減益へと沈むとされ、企業の業績も大きく失速している（「東洋経済統計月報」九十八年五月）。

二. グローバル化の進展

こうした経済の大転換をもたらした原因として、一般的には情報化、サービス化、グローバル化、カジノ化（マネー経済化）などがあげられるが、なかでも重要なのが、経済や産業のグローバル化（グローバルゼーション）である。日本経済のグローバル化は貿易・資本の自由化、金融の自由化、情報通信の革新、輸送技術の飛躍的発達をテコに八十年代以前にもかなり進展していたが、九十年代にはこうした経済的・技術的な要因に国際政治的要因（冷戦体制の崩壊、アメリカの覇権の動揺など）も加わって、このトレンドが拡大している。「世界経済はグローバル化、ボーダレス化が進展し、産業の地理的集中という視点でみた世界地図がダイナミックに変貌を遂げている。……こうしたメカニズムは、成長著しい東アジアにみられる日本↓N

IES↓ASEAN↓中国と順次経済発展が周辺地域に拡大する雁行発展の形態にも関係している」（「通商白書」九十七年版）。「経済活動の地球規模の拡大は、人々の意識のボーダレス化も促し、経済問題のみならず、人口、環境、食料問題等について、全地球規模で対応すべき課題であるとの認識が広まっており、こうした意味でもグローバルゼーションが進展している」（「経済企画庁編「構造改革のための経済社会計画」九十五年）などといわれるように、グローバル化は経済活動のみならず社会、文化など広範な分野をカバーする決定的なトレンドとなった。

ところでグローバル化とはどのようなトレンドを意味する用語であろうか。八十年代までは、国際化という概念がよりポピュラーであり、しかも一般的には国際化とグローバル化は厳密には区別されていなかった。表2は九十年代に発行された若干の国語辞典や用語辞典における説明をまとめたものである。この中でグローバル化やグローバルゼーションの説明があるのは四辞典で、いずれもグローバルゼーションが見出し語となっている。最も発行部数の多い「広辞苑」第四版を含め他の辞典では、グローバルの説明がなされているだけである。因に国際化については、これらの辞典でもとりあげられており、「広辞苑」第四版では「国際的な規模に広がること」、「大辞泉」では「国際的な規模に広がること。また、国際的な視野をもち、その観点に立つて行動すること」という説明がある。「グローバルゼーション」については、「世界化」、「全世界一体化」、「経済活動やものの考え方を世界規模に広げること」、「世界複数本社化」などの記述が目立つ。また「国語大辞典」（小学館、八十一年）など八十年代に行われた辞典で、グローバル

三、国家の稀薄化

化やグローバル化の進展を見出し語にしているものはない。このように、国語辞典等では九十年代でも、グローバル化はそれほど一般的な概念とはなっていないのである。

政府のビジョンや専門的な論文（経済学、社会学など）レベルでも、こうした用語が多用され始めるのは、八十年代末かないし九十年以降である。例えば通産省関係でグローバル化を体系的にとりあげたビジョンとしては、八十九年の「共存的競争への

表2 国語辞典・用語辞典にみる「グローバル化」等の説明

辞 典 名	説 明
「例文で読むカタカナ語の辞典」（小学館）1990年	「グローバル化」：世界化。全世界に広めること。また経済活動やものの考え方を世界的規模に広げること。 「グローバル」：世界的な規模であるさま。また全体を覆うさま。包括的。
「広辞苑」第4版（岩波書店）1991年	「グローバル」：世界全体にわたるさま。世界的な。地球規模の。
「大辞泉」（小学館）1995年	「グローバル」：世界的な規模であるさま。また全体を覆うさま。包括的。
「日本語大辞典」第2版（講談社）1995年	「グローバル」：全世界に関係がおよぶさま。
「大辞林」第2版（三省堂）1995年	「グローバル化」：世界的規模に広げること。企業経営で世界各地に複数の本社をおくことなどにいう。 「グローバル」：世界的な規模であるさま。地球全体にかかわるさま。
「新明解国語辞典」第4版（三省堂）1996年	「グローバル」：世界的な規模で行われる様子。
「現代国語の基礎知識1997」（自由国民社）1997年	「グローバル化」：世界化。全世界一体化。 「グローバル」：グローバルとローカルをあわせた造語。
「知恵蔵1998」（朝日新聞社）1998年	「グローバル化」：世界化。世界複数本社化。 「グローバル」：世界的な。地球規模の。

道「グローバル化」が目立つ。この報告書では、グローバル化のシヨンの問題を「外へのグローバル化」のシヨンの問題として、海外事業活動の積極的展開、「内なるグローバル化」のシヨンの問題として、輸入拡大、対日投資拡大、「相互依存関係の深化」の下での各国間政策リテンションの必要性の三視点から検討したとされており、様々なかたちの国際交流が進行する中で、世界経済の相互依存関係が深化していくことや各国経済・社会が緊密に結びつけられることをグローバル化のシヨンの内実とみなしている。「創造的革新の時代—中期産業経済展望研究会報告書—」（通産省、九三年）では、冷戦構造の消滅や中国における「社会主義市場経済」への移行による市場経済化をテコに世界経済が一体化し、その下で次のように産業活動のグローバル化が進展していると指摘する。すなわち、企業は「国境を越えて

活発に移動し、グローバルな視点から情報技術を収集し、最適の地で開発、設計、生産を行うなど、世界のさまざまな資源を自由に利用し、結合するという活動を行うようになってきている」と。
こうしてグローバル化は世界経済（各国経済及びそれを構成する企業、家計などすべての経済主体）の相互依存関係の徹底化つまり経済の世界化や地球化を主要な内実とするが、これに関連して国家の稀薄化や崩壊に言及する論者も少なくない。現代は歴史の転換期にあり「ポスト資本主義社会」に移行しつつあるとするドラッカーは「通貨に祖国なし」「情報に祖国なし」といわれるように通貨も情報もグローバルな存在になり、国家の管理は不可能とみる。また「主権が意味をなさなくなっていくつかの重要な分野において、国民国家はすでに『バイパス』されつつある。あらゆる政府が一国だけではも

とより、多国間協力によって
も対処できない問題に直面し
ている」と述べ、国民国家を
越えたグローバル化の進行の
確実性や「主権」を有する
「グローバルな機関」の必要性
などを指摘している（ポスト
資本主義社会」ダイヤモンド
社、九十三年）。田中明彦氏は
現在の世界システムは、冷戦
の終結や覇権の衰退により、
経済的相互依存関係を除き、
近代以前にヨーロッパに存在
した「中世」とかなり近似す
るシステム（「新しい中世」）
に移行しつつあるという。こ
のシステムのもとでは、巨大
企業、NGOなどの非国家主
体の重要性が極めて大きくな
り、経済問題の多くが「国際
問題なのか国内問題なのかほ
とんど区別できない」とされ
る。経済的相互依存も水平分
業、産業内貿易、多国籍企業
による生産、世界金融市場の
形成など新しいタイプの出現
により、八十年代から第三段
階に入ったとみる。この段階

では、国家同士の相互依存は
もとより国家と非国家主体あ
るいは非国家主体ネットワーク
との間の相互依存も進展し、
これらの相互関係は著しく敏
感となる。さらに「ナショナ
リズムの相対化現象」が多く
の先進国に生じていることな
どを例に国民国家が脆弱化し
ていると指摘するのである
（「新しい中世——二十一世紀の
世界システム——」日本経済新
聞社、九十六年）。

またR・ロバートソンは、
「グローバリゼーションとは、
今日有力な、もし放置してお
くと世界を同質化し、個性
を抹消してしまう過程だと考
えるような傾向よりも、われ
われはずっと繊細かつ精緻で
ある必要がある」と指摘し、
「グローカリゼーション」（世
界化するとともに地方化する
こと）というテーマを設定す
る。グローバリゼーションは
本質的に個別主義を推進する
プロセスでもあるとされる。
つまりグローバル化の進行に

よって、ローカルなもの意
義も高まるというのである
（「グローバリゼーション——地
球文化の社会理論——」東大出
版会、九十七年）。

このように、グローバル化
は国家そのものを超えたり、
その存在意義が稀薄化するこ
とと同時に国家間、非国家主
体（各種の組織や団体）間等
の相互依存関係が深化するこ
とを本質としている。その意
味では、国家の存在を大前提
にしている国際化（インター
ナショナルリゼーション）はグ
ローバル化とは異質な概念な
のである。

四 地域のアイデンティティ

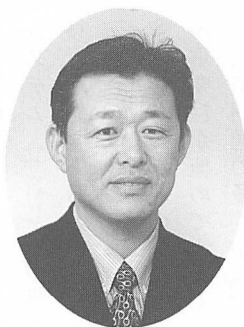
「今やグローバル経済がわ
たしたちの世界観を形づくっ
ており、ものの考え方を変え
ている。誰もが新しい現実
に直面している」（レスター・サ
ロー「資本主義の未来」TB
Sブリタニカ、九十六年）と
いわれるように、二十一世紀
を目前にして、世界を一体的

にカバーするグローバル化は
いよいよ決定的である。どの
ような地域であつても、この
トレンドは貫徹する。ロバー
トソンのグローカリゼーショ
ンという用語が示唆するよう
に、グローバル化は一面で国
境を超えた地域や組織さら
に個人などの相互依存関係を
緊密にし、それぞれの存在意
義を高める力を持っている。
またこうした相互依存が深ま
る中で、地域と地域や組織と
組織の多様なネットワークが
生成し拡大していく。グロー
バル化は正にローカル化や地
方化のトレンドともいえるの
である。当然のこととして、
地域や組織のアイデンティテ
イの確立が要請されている。
自分たちの住む町や村の固有
な資源や特性は何なのか、そ
の個性や魅力に磨きをかける
にはどうすべきなのかなどが
問われている。したがって、
グローバリゼーションの時代
は、新しいまちづくりの時代
ともいえるのである。

キラリ光るまち

“楽しい町にしようか”

落合町楽しもう課 課長 青木 信治



《楽しもう課》誕生

「おいしい、何かおもしろい事はないんかのー」寄れば口から出る言葉。「だったら楽しい事をしようや」「町の中心から楽しくしていこう」「石頭の役場の連中を巻き込んで、ちいとかわらこうしていこうか」「だったら、役場の課を一ついだけいて課を創ろうか」「楽しいほうがいいし、楽しく呼びかけるように○○か！と引ッ

かけて《課》をつけて《落合町楽しもう課》というのはどうじゃるか」という事で名前と目的が決定。

次に課員の集め方。目的通り、役場の若手職員（次期役場を担う人材）、上司に歯向かう中堅職員（金の出所また色々行政として巾が効く人材）、町内グループ、各種団体のリーダー格の人（リーダーシップが取れ人集めが得意）、若手企業オーナー（金銭的に経営感覚に優れ経費の使い方がうまい）、学校の先生（イベントによって子供達の扱いがうまい・体育・音楽・美術等）、主婦（小まめに動いてくれ、片付けが上手）、元気人間（力持ち）、能力人間（色々な技術

をもっている）新聞記者（マスコミ、PRに優れる）住職（将来の未透視がたつかもしいない？）、自衛官（職業は伏せてくれといつも言う）、こういったメンバー、五十三名いる。いつか町長もいれたい。

結成以来、色々イベントを行って来た。楽しい事が基本にまずネーミングのおもしろいもの、楽しいもの。おもしろすぎて誰も来なかった事もあった（失敗！）が、我々はあくまで民間団体であるがゆえに失敗は許される。

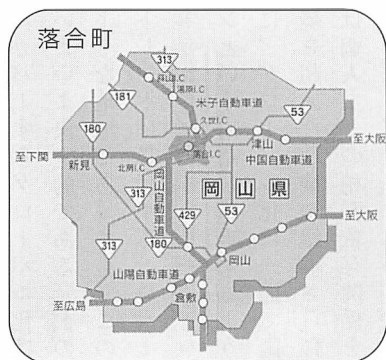
行政の取り組むイベントに失敗は許されない。何か月も前から担当者が計画し、上へ上へと練られて行く、ともすればプランニング会社まで参画しているしまつ、失敗があるはずがない。こういう中で育った行政マンに考える場、実行する場を与え物事に対して失敗を恐れないことを肌身を通して経験してもらう場が楽しもう課である。

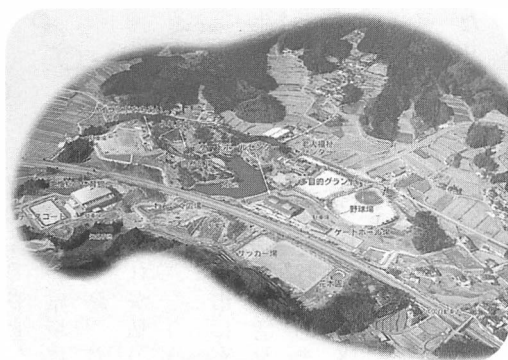
責任はなすり合い、酒と

もに流される。経験は力なり、金を出しても味わえない。二度と失敗はすまいと言いながら三度した。主催者が楽しめばいい、これが基本だ。何度と言ってまた酒を飲む。

行政イベントにお邪魔

町制四十周年記念イベントに四十時間ソフトボール大会を行った。町内各団体に要請、時間内の割り振りはこのイベントも失敗はない。しかしソフトボールのできる人、このイベントに参加できる人は楽しいかもしれないが町民一七、〇〇〇人の何十分の一にしか過ぎないのではないか。





落合町総合公園

この事を疑問視した我々は、町民ほとんどの人ができることをこのイベントに付け加えようと考え、町民にクイズで参加を呼びかけた。「この大会は四十時間行われますが何イニング行われるでしょう」・「紅白戦なのでどっちが勝つでしょう」・「ホームランは何本出るでしょう」等はがきで参加してもらった。

ードを作って外野フェンスに取り付けた。

毎年ふるさとまつりもマシネリ化の一途をたどっていたので、この祭りと同じ日に「全国紙ひこうき飛ばしコンクール大会」を開催した。新聞紙上にPRしたため今までにない方面からの参加者があった。幸いにして落合町は高速道路のクロスポイントとして中国自動車道と米子・岡山・高知道の接点であるため広い地域の人々との交流ができた。

楽しもう課の公園活用術

今回、落合町が五カ年計画で三十八億円を投じて今時全国の地方自治体で大流行の総合公園を建設。体育館、野球場、屋内ゲートボール場、芝張りサッカー場、多目的グラウンド、ちびっこ広場、庭園、宿泊施設などなど。

しかしそのつけが町民に重くのしかかっているのが現状である。これからの事業ができない、削られる、金が無い

が、行政の口癖になっている今日、町民としてどうするべきか？行政いわく町民の為に作った施設と。だったら町民としても活用を考えなければいけない。行政の悪口を言っても始まらない。

楽しもう課として今回この公園のなかにジョギングコースとウォーキングコースを道なりに作ってみた。

我が課のメンバーに役場職員が三分の一いるのでこの中の教育委員会の職員と担当して社会教育の方面の利用促進を呼びかけ、町内の企業団体で行っている会でもこの公園の利用促進について検討会を開き町民に利用を呼びかける提言をした。又、栄養改善推進協議会の方にも呼びかけ、

ウォーキングコースの方を担当してもらい、二つのコースでそれぞれの消費カロリーを測定しマップを作った。こういった取り組みを検討していただき、この公園を運営管理している第三セクターの落合

振興公社の許可をもらった。

そして、コースの中には、右、左、直進とかそれぞれの方向を示す案内道標を設置。その上には落合町のマスコットとして自負しているキラタローの人形を付け、可愛さ、親しみのある道標とした。また、道標には町内の企業三十五社からのスポンサーを募り明記した。総事業費は七十万円である。

これからは民間団体である我々も行政とのそれぞれの役割と分担において共存し実行していく時代になっていくのではないだろうか。

「生きてる間は楽しく行こう。」
「楽しさは皆に分けあおう。」



キラタローの案内道標

私のふるさととは、
広島県との県境に
ある小さな島、岩
城島、それが私の
ふるさと。

中学卒業後、新居浜市に寮
生活をしながらの学業生活だ
った。新居浜に出た時、あま
りにも都会ぶりに驚きと戸惑
いを思い出す。

少年時代は、父と釣に行っ
たり、友達と海に泳ぎに行っ
たりして、瀬戸内海のきれい
な海での生活を満喫していた。

ふるさとを離れて十年余り

『ふるさとへ』



が経った。歳月がたつほどに、
ふるさとの良さ、素晴らしさ
が分かるようになった。自然
の美しさ、新鮮な魚のおいし
さ、人の温かさをいつまでも
そのままにと願う反面、私が
ふるさとを離れて、就職先や
過疎化・高齢化などの問題が
山積みとなっている。

しかし、自然を守りながら
の観光地として、更なる発展
を願いたい。この点について
は、岩城の行政の方々の取組
みに対し、非常に高い評価を
している。

島の中央にそびえる積善山
(標高三百七十メートル)。山
頂には展望台があり、青い海
に浮かぶ因島や弓削島など芸

予の島々が一望できる。
三百六十度のパノラマは、
見ごたえ十分。運が良ければ、
はるか東に瀬戸大橋も展望で
きる。

山頂へは、港から徒歩でお
よそ九十分。ドライブ道も整
備されている。尾根伝いの遊
歩道などには、約三千本の桜
が植えられ、春はピンクに覆
われる。

展望台付近には最近、パラ
グライダーの基地が設けられ、



積善山

瀬戸内海の「空中遊泳」を楽
しむ人々も増えている。現在、
コースの認定作業とイベント
開催計画が進められており、
新たなプレーゾーンとして
注目を浴びそうである。等々、
観光地としての魅力を十分に
発揮している。

観光地としての、魅力溢れ
る岩城島。岩城島で元気に頑
張っている人達にとって、夢
のある島を目指して頑張っ
て欲しいと思う。

『何でも話せる青年団』

大洲市

都築 藤子

私が属する愛媛県青年団連合会は、毎年県下の青年団員が集まって話をする『レディースフォーラム』を開催しています。この行事は、県下の青年達が、青年団活動や仕事を通しての悩み・日常生活で生じる男女の考え方の矛盾等を出しあって、多くの仲間との出会いや触れ合いの中で女性問題に気づいてもらいたいと思います。

昨年は、ちょっとした体験をしてもらおうと思い、大洲



に新しくできた在宅介護支援センター『フレンド』の方に講義と実習をお願いしました。

講義は、これから私たちが必ずといっていいほどたずさわるであろう老人介護について話してもらいました。在宅介護を取り巻く高齢化の現状を話してもらっていく中で、①女性だけの介護ではなく家族全員の協力が不可欠であるということ、②やってあげるのではなく自分でやりたいという意欲を大切にして行くためには、できる事は気長に見守り、できたときは大いに誉めていくこと、③長期の介護になることが多いので、いろいろな公共サービスを利用して介護する人が負担にならない

ようにしていく事等を分かりやすく教えてもらいました。

実習では、ベッドから車椅子に移る方法や車椅子を実際に押したり乗ったりする事によって、押す方の苦労や乗っている人たちの乗り心地を体験しました。その日は天気良かったので、そのまま外へ出て平らなところだけでなくこぼ道や段差への対応の仕方でも教えてもらい、車椅子に乗っている怖さも体感できたのではないかと思います。

参加者は、今まで車椅子を押したことがない人が多く、悪戦苦闘しながら押していましたが、みんな十分に満足した様子で、外から帰ってくる頃にはかなり上手に押していました。

二日目の話し合いは『仕事について』『恋愛、結婚について』『青年団活動について』『女性活動のために』と四つのテーマを設定して、分科会ごとに女性と男性の意見を思う存分出し合って時間が足りない

くなるくらいでした。

私もその中の司会者の一人でしたが、私の分科会は参加者のほとんどが顔見知りということもあり、青年団活動・恋愛・結婚から育児関係にいたるまで幅広く話ができて、かなり充実したものになりました。

このように、これからの社会をつくる我々青年たちの集まりの中で、女性と男性が女性問題について話しあえるのは良い事だと思います。

今年度もいろいろな事をみんなで話し合って、少しずつ女性に優しい社会になって行けたらと考えています。女性に優しいという事は、男性にも、子どもたちにも、老人や障害をもった人にも『優しい』という事になると思うから……

愛媛県の施策で平成五年に
発足した「ゆげ女性塾」は、
一年間の勉強会を終え翌年か
ら自主活動を始め今年で六年
目に入ります。二、三人の出
入りはあったものの現在の十



—いきいきグループ紹介—

“何でもやっちゃう ゆげ女性塾”

ゆげ女性塾事務局 村上 律子



七人は、個性豊かで賑やかな
メンバーです。

「出来る人が、出来る時に、
出来ることをしよう」をモッ
トーに活動してきたものです
から、肩に力が入らず、様々
な活動を楽しみながら生き生
きとしています。

今では、色々な場面に声が
掛かり、これをこなすことで、
周囲に力を付けて頂いている
様です。

「何でもやっちゃう ゆげ
女性塾」をタイトルにホーム
ページも自分達で開設しまし
たが、タイトルどおりです。

こうなると世の常で、雑音
が入ってきます。しかし、こ

のようなことにも
動じない強い絆が
「弓削民俗誌」刊
行によって培われ
たようです。

弓削民俗誌

文章を、ペンを、
原稿用紙をといた
ことに無縁であ
った主婦達が、ボ
ランティアで聞き
取り調査をし、本
づくりに挑戦した
わけです。出来上
がった今では、感
慨のみですが、過
程はまさに産みの
苦しみでした。

最初のお年寄りへの聞き取
り調査の頃は、嬉々として話



弓削民俗誌

される顔を見るのがとても楽
しかったのですが、二年目の
原稿を書く頃は笑みは失せ、
一か月、二か月と原稿の仕上
がりが遅れ、締切が迫ってく
る中で、再調査に走り回った
り、資料を搜したりとせっぱ
詰まっていきました。そのよう
な中で、皆共に励まし合いな



聞き取り調査風景

がら期限ぎりぎりに原稿が仕上がった時は、喜びというより間に合ったという安堵の思っただけでした。これが出来たのだからやる気さえあれば何でもできる。というところに全員が達したようです。

発刊記念には、調査中にお年寄りから頂いたり、預かったりした古い民具や写真を展示する「民具展」を催し、多

くの方々に懐かしんでいただきました。これらは、小学校で有効に活用しています。

素晴らしい指導者、松浦良代女史（松阪市在住）との出会い、彼女を通じての国語学者金田一春彦先生との出会い、これらがこの民俗誌刊行への伏線であったようです。

このご縁はまだ続きます。九月下旬には、金田一先生の

作曲された楽譜集が出版されるに当りコンサートが開催されます。この会へも誘いを受け唄と踊りで参加します。今回は東京で大騒ぎです。

活動の輪

我塾は、女性の目から見た環境問題に取り組もうと始まったのですが、息切れもせず次から次ぎへと活動の輪を広げました。生ゴミを堆肥化するボカシづ

くりと廃食油で作った固形石鹸づくりは定着し、常に公民館に置いてあります。廃食油を使った粉石鹸もや々と作れるようになりました。昨年からは、他のグループとの交流の中で、公園の花づくり、健康づくりに関する勉強会ではハーブを栽培したり、海草や薬草を風呂で試したり、食したりと趣味と実益を兼ね、特産品でも生まれればと試行錯誤しています。

今夏は、土生地区に古くから伝わり廃していた盆行事の「庄右衛門踊り」を三十数年ぶりに復活させるお手伝いをし、イベントに華を添えるべく新たに「庄右衛門だんご」を作りました。今後は、各種イベントで町内の方々に食して頂く積もりです。

まちづくり

男女共同参画型社会の確立は、性的役割分業を考慮し、各々が相手の良さを認め、人としての義務を果たしていく

ことにあると思います。

我々の活動を支えているのは家族であり夫達です。女達が強かったのか、夫達が良き理解者であったのかは定かではありませんが、今日まで順調に活動出来たのは、夫達の深く温かい理解があったからです。

地域を我々の手という気負いもなければ、自負もありません。価値観の多様化した今、全ての人が納得する活動は無理です。ただ自然との共生を基に、地域に根ざした活動をすることで、地域の人達も喜び、ふるさと弓削を大切に思ってくれる人が増える。これが我々の活動の意図するところです。

今、町内で色々な活動の輪が広がろうとしています。これらが確かな輪となり、共に楽しい弓削づくりが出来ればと、今日も鳥の女達が右往左往しています。

<http://160.245.112.4:8090/sain/study/josijuku/katudou.html>



ふるさと民具展



— 研究員レポート —

物語づくりはこつこつと

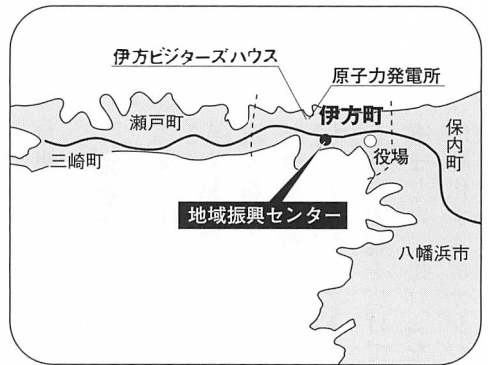
客員研究員（伊方町役場） 稲田 紹



懐かしい味

この四月にまちセンでの修行？を終えて帰って来た私は、給食センター勤務を命じられ

た。何年かぶりで給食が食べれるという安易な気持ちが行ったのはいうまでもない。センターでの一連の仕事はというと、まずその日の原料の受入れ。肉屋さん、やさしい屋さんたちが納入した原材料と伝票とを照合する。冷凍食品などは詰め替えなければならぬ。なぜなら包装している段ボールなどに、ばい菌などが付着している可能性が多く、そのまま冷凍庫には入れてはいけないからである。清潔第一のセンターならではの作業である。



「稲田くん」調理員さんたちからのラブコールである。何かと忙しいオバチャン（調理員さんたちごめんなさい）たちのお手伝いである。白衣を着て手を消毒し、口にはマスクを充てる。まるで手術を執刀する外科医のような格好である。そこでの私の作業は二つ、ご飯入れと、揚げ物を数えること。アツアツに炊けたごはんを、決められた分量ずつクラスごとに分けていくのである。メガネを掛けている私にとっては湯気で計量器の目盛りが見えない、外すと全体がほやける。この時ほどメガネの不便さを感じたことはない。揚げ物を入れる



ためにはナイロン手袋をした上に消毒をする。これを分けるのがまた熱い！ベルトコンベアーに乗って程良く日焼けした揚げものたちが受け皿に流れ落ちてくる。「稲田君こうするんよ」というオバチャンの手捌きは見事である。熱いのもろともせず、手際よく食缶に入れていく。流石だなあと感心してしまった。時には試食もする。これがまた旨い。何でも出来たて、作りたてのものが一番である。別につまみ食いではない、中

まで火がとおっているかどうかの確認である。作業の合間に試食するのが唯一楽しみでした。

私だけかもしれませんが、給食を作っている訳でもなく、ただお手伝いをしているだけなのに、美味しそうに食べる子供たちの笑顔が見えてくるようで、少しでも成長の手助けをしているような気がしました。

しかし、毎日のようにその給食たちも残飯となつて返ってくるのです。それは容赦なく、そのまま生ゴミとしてゴミ収集車に連れて行かれます。その生ゴミ、いや残飯たちを何とか地球へリサイクルできないものか、例えば肥料として活用できないものなのか自分なりに模索していました。だからといって、急にそれに取り組むのは難しいと思います。ともあれ給食センターでの日々は過ぎていきました。

本当に紙漉き好き？

七月の人事異動で「伊方町地域振興センター」に配属になりました。ここは、地域の特産品の開発など、その名のとおり、地域振興を目的に設置された施設です。

ここでの私の仕事は、町花であり、特産品でもある「つわぶき」を使つた和紙づくり。つわぶきはふきの一種で、漬け物にして食べたりします。ここ佐田岬半島地域では、あちこちの道端などに黄色い花をつけて咲いています。その「つわぶき」をなぜ和紙に？それに目を付けた人がいたのです。前任研究員（振興センターでの職名）兵頭達也氏です。漬け物で使うのは身の部分のみ、皮は廃棄物として捨てるだけ、それを何とか利用できないものかと思案中閃いたのが紙づくり。繊維の多い「つ

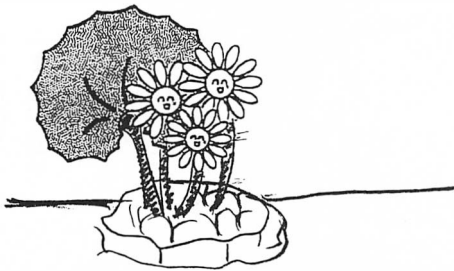


伊方町地域振興センター

わぶき」なら紙ができるはずと。

ところで、和紙といえは高知県伊野町の「も」さん（このほりくらぶ）元氣ですかね。まちセンにいた頃視察で、お話を聞き、舞たうんにレポートとして書かせていただいた。まさかその時私が、和紙づくりに携わるとは思ってもいなかったのですが、開けてびっくり玉手箱。結構和紙漉くのって楽しいのです。その

時、そのときで色んな表情の和紙ができる。一瞬職人になった気分になります。漉いたあと、気に入らなければ、もう一回漉き直したりと、そんなこんなで楽しい日々を過ごしています。開発したのは私ではないけど、その「つわぶき和紙」に付加価値をつけていくのは、私に科せられた役目ではないか、と考えてます。楽しくなければ、何も出来ないし、長続きしませんよね。これからも人と人との繋がりを大切にし、色んな所へ顔を出したいと思っています。



つわっこちゃんファミリー



— 研究員レポート — 地域自治の充実を求めて

— 全国自治体政策研究交流会議

&自治体学会—

研究員 伊手 博志

古来、神の国といわれる伊勢。三重県伊勢市は伊勢神宮の門前町として発展し、その歴史と共に歩んできた。そのため、長い年月をかけてホスピタリティの文化を育んできたようである。

また最近では、伝統産業を支える家内工場や酒問屋の蔵等をまちかど博物館として一般公開するなど、歴史性、地

域性を活かして様々なことに取り組んでいる。

そんな伊勢市において、八月二十七日（木）から二日間、第十五回全国自治体政策研究交流会議と第十二回自治体学会が開催された。今回参加する機会を得たので、私見を交えながら報告させて頂きます。

時代認識というもの

「ともに変えよう・ともに創ろう地方自治」が、二日間に共通したテーマである。

地方分権に向けて本格的な動きが展開されようとしている時であり、地域はこれからどうなっていくのか、生き生きとした地域社会をどう創っていくのか、そうしたことが今問われているようである。

もちろん、地域は行政や住民それぞれが勝手に創るものではなく、お互いが力を合わせて創っていくもの。その点から、行政と住民の関係や従来の在り方について今一度問い直してみる必要があるのだ

はないだろうか。

今回の開催地である三重県は、行政システム改革や事務事業評価システムの導入により、全国的にも注目を集めているところである。その先頭に立つ北川知事の講演は興味深く刺激的であった。

時代をコペルニクスの転回期にあると認識し、方法論よりももつと根本的なところで本質的な議論を積み重ねることの大切さ、そしてすでに起こっている情報革命の中で、行政も積極的に情報公開をしながら住民とパートナーシップで政策形成をしていくことの必要性が、特に強調されていたように思う。

協働に向かって

NPO法の成立をきっかけとして、民間による公共的活動が活発になってくると、行政の在り方が根本から問い直されることになるそうである。引き続き、今後行政と民間の協働が当たり前になってい

くことを目指したいという趣旨もふまえ、協働文化の創造について地域からの発言や活発な討論が行われた。

はじめに、災害時の対応等の在り方を市民レベルで研究し活動している災害ボランティアネットワーク鈴鹿の南部さん、編集、取材を通してふるさと三重の良さを掘り起こしながら紹介、また流域連携による地域おこしにも取り組んでいる伊勢文化舎の乾さん、地域における企業とNPOの新たな関係づくりを目指してパートナーシップ・サポートセンターを設立し活躍されている岸田さんから、それぞれの取り組みが紹介された。

そして、民間活動の自立と行政との新しい関係について、大森彌東大教授、林泰義計画技術研究所長、笹井三重県嬉野町長の間で議論が交わされた。嬉野町は、住民参加による地域づくりを展開するため、いかに住民を行政に呼び込むかを考え、広報を住民と一緒に

になって編集するなどの取り組みを行っている。林さんは、地域で玉川まちづくりハウスというNPOを設立し、ワークショップによる住民のまちづくり活動を支援している。

ところで、住民参加にはいろいろなタイプが考えられるが、民間が自発的に行う活動もまた地域にとって意義あるものが多い。ただ独立し自立した民間活動は町村ではなかなか育ちにくいようであるし、行政と住民がお互いを理解し合う意識も持ちにくそうである。そのため行政が仕掛人として果たす役割がまだ少なからず求められているようにも感じられる。どのような住民参加の仕組みを作っていくのが今後重要なのであろう。

夕方からは情報交換会が行われた。全国から集まった市民、学者、自治体職員が互いの情報を交換し、盛んに刺激しあっている様が特に印象的であった。ネットワークを形成し地域の実践活動に活かし

たい、そんな思いからか、参加者は常に積極的でありエネルギーに満ち溢れているようであった。

伝統文化ってなに？

翌日は、自治体学会の総会があり、終了後、全体会やパネルディスカッション、分科会が行われた。

その中で、私が参加した第八分科会「伝統文化とまちづくり」について報告します。

いわゆるまちづくりについては、今まで随分と話題にのぼり、具体的にいろんな取り組みもされてきたようである。しかしながらその抱えている枠組みや背景は、特にここ数年大きく変わってきている。

そこでこの分科会では、地域の歴史や文化を振り返りながら、従来の方向と将来の方向をどう咀嚼し、展開していくかということが議論された。

地元伊勢市の高橋さんから、歴史的町並み保全や伊勢まちごとテーマパーク構想を

ベースとしたまちかど博物館運動の取り組みが、松阪市の田畑さんからは、木綿という遺産を活用しながら保存していることや若い人が受け継いでこそ伝統は発展するということ考えが、やきもの産地ネットワーク研究会の青山さんからは、産地連携の必要性とある程度収益をあげながら伝統産業を保存しようとする取り組みが、そして静岡県金谷町の孕石町長からは、様々な活動によって町民と行政の間に信頼関係が築かれ、町民主導、行政支援型のまちづくりが身



充実のひととき

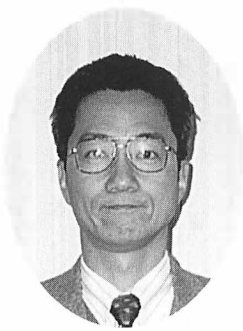
を結びつつあることが報告された。また愛知県足助町の矢澤さんからは、三州足助屋敷や百年草での取り組みに加え、今の社会に自分の地域から何が問いかけられるのか、地域の伝統文化とはいったい何だろうか、という興味深い提言をいただいた。

伝統文化は地域にとって大事なものである。しかし、ただ保存すればいいというものではない。現代における価値をどう創り出すのか、その仕組みをどう創っていくのか、そんなことが問われているように感じられた。そしてそのためにも、地域の条件を自分のものにした見極めるための力をつけることがより重要となってくるのではないだろうか。

いろんな意味で、今後の方向性を考えさせられた貴重な二日間であった。

ちなみに来年は、八月十九日・二十日に、岡山県倉敷市で開催される予定です。

いよいよ五回目ともなると、読者諸兄の目も肥えてきて、少々のことでは動じないかも



“MY TOWN,” うおっちゃんく

歩キ目デス & 足ラテス

第五弾



岡崎 直司

知れない。見（観）方は色々それこそ人によって千差万別で自由なのだ。

「愛のイス」（前々回）や「植木鉢」（前回）のように、一つのテーマで町中を眺めるもよし、一・二回目のように、ジャンルを問わずに目を遊ばせるもよし。今回は後者、アトランダムな無手勝流ウォッチングを再び。

① 屋根上の植物園

もうこれは、それ程説明の必要は無いかと思う。カラーでお見せ出来ないのが残念だが、黄色い花は何だろう。そして何より、屋根上をはどういうに育っている植物は？。

ここは紛れもなく瓦屋根。庭先でも温室でもない。新種のガーデニングか。土も無ければ、水だって常時は望めない。かろうじて雨降りの時だけが頼みの綱。今夏の陽照り続きでは、二階手摺りからジヨロで水をかけてでもやらぬ



限り、その生存さえ危うい。ただ、一つ言えることは、この民家が今時のツープバイフオーやらの新住宅ではなく、昔っからの在来工法で建てられた家であるらしき事。つまり、瓦の下には土がある。（現代は棧瓦と言って、土を置いて瓦を葺くなんてことはしない。）従って、瓦の重なり、その生き間に上手く根を生やせば、こうして生きられる。ギリギリの生命力でもある。植物は凄い、何ともエラい！



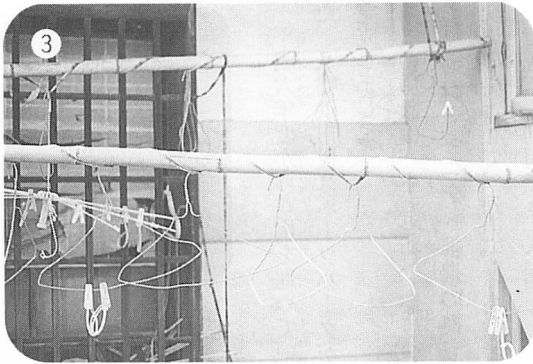
② 日傘行列のトマトたち

この光景に出くわしたのは、肱川町を走っていた時。遠目に矢鱈とコウモリ傘が並んでいるのが見え、ナンダロー、と車を停めた。

合計十個の傘が菜園に花開

いていた。そして、その下には瑞々しい新鮮なトマトたち。そう、これらのコウモリは彼女たちの日傘だったのだ。

ヨーロッパの貴婦人よろしく日傘を差したトマトたち。ふと、「グランドジャットの日曜日」というスーラの絵画を思い出してしまった。



③ ハンガー付き物干し竿

これは新鮮な発見だった。と言うより、虚を付かれた、

と言った方が正確かも知れない。ウーレン、ありそうでなかなか無い物件である。

あの、クリーニングの時に付けてくる針金のハンガー。結構たまつてくると厄介なシロモノではある。捨てるには燃えないし、高価という訳ではないが、「私はハンガーだ!」という製品としての明確な主張があり、ポイツとやりづらい。でも、再度ハンガーとして使うには、あまりにも安っぽく、第一肩の線が細過ぎて長時間吊しておくと、それこそ型（肩）くずれ。ついつい、その内に各家々で無用の長物化して在庫が増えることになる。

そうか、こういう使い方があるのか、ビニールで被覆されていてサビないし、こうして使えば一石二鳥。ナルホドナ。妙に感心してしまっただ、でも真似るには何だかナ

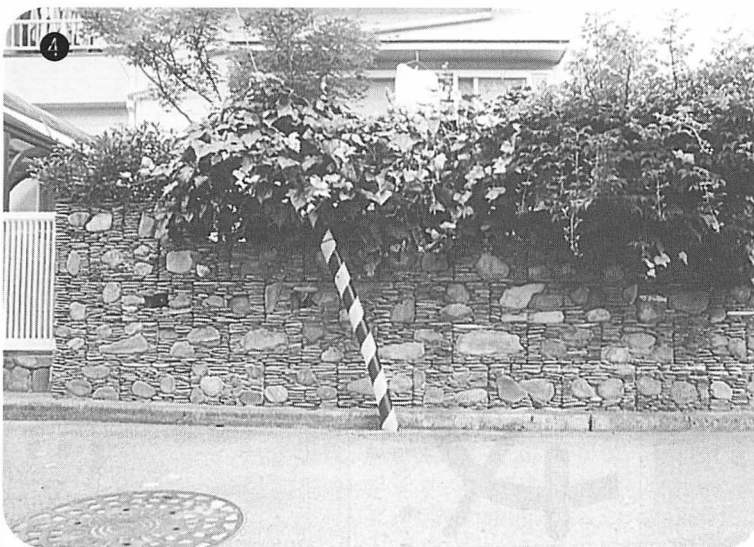
④ 青石のグッドデザイン

松山市の今出を歩いていて出合った、スグレモンの青石塀。コリヤ美しい。黒黄稿のプラスチックカバーが折角の景観を壊して無粋だが、この塀はイイ。

青石と言えば、伊予を代表する高級庭石。西条近辺の国道沿いには、庭園業者のものかゴロゴロ、大石が置かれていたりする。

実は、この青石の元となる緑泥片岩層が佐田岬半島から徳島県吉野川沿いまで、四国を東西に貫いている。

この偏平な青石は、西宇和郡界限の海岸部によく見られるもの



だ。モルタルで同一形のピースに固め、うまく塀としての全体デザインを調整してある。無味乾燥なブロック塀に比べりゃ余程イイ。地域素材をうまく使った好例であります。

『市民スポーツパーク』 オープン

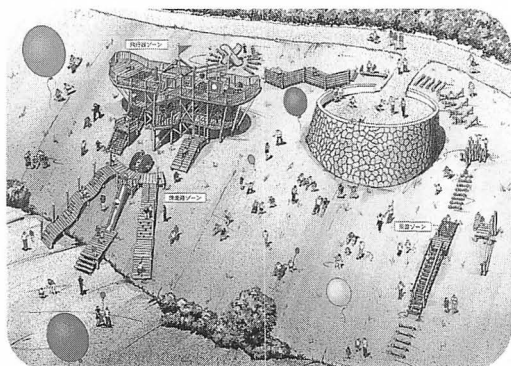
八幡浜市

平成六年度から整備を進めていた、八幡浜市民スポーツパークが完成しました。

この施設は、生涯学習、健康づくり、コミュニティ推進の拠点、交流の場として、幼児から高齢者まで幅広く利用できる公園として、スポーツ、フラワー、冒険の三つのゾーンから構成されています。

スポーツゾーンは球技、各種イベント等の開催、フラワーゾーンは自然環境重視のふれあい体験、冒険ゾーンは、親子のふれあいと野外交流の場となっており、展望広場には東屋があります。

年中無休ですので、家族連れ、友達とお出かけ下さい。



駐車場も完備しております。

〈問い合わせ先〉

八幡浜市建設課

☎ (〇八九四) 二二一三二二

産直店 「百姓百品東本店」 好評 野村町

松山市東本町に、野村町「百姓百品東本店」が六月からオープンしています。

「新鮮な素材と暖かい心をお届けします。」をキャッチフレーズに野村町の新鮮な野菜や農産加工品・特産品を毎日直送し、松山市民の皆さんに喜んでいただいています。

その外、体験農業や交流会、各種イベント等野村町の情報が一杯あります。

1. ニガリ豆腐
2. 蒸しパン
3. 米
4. トマト
5. キュウリ



〈営業時間〉
午前九時三十分～午後六時三十分
〈年中無休〉
〈問い合わせ先〉
百姓百品東本店
☎ (〇八九) 九二一八三二二



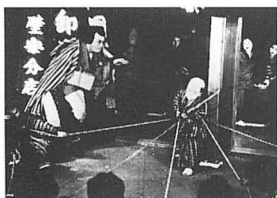
☆読者からのお知らせコーナー

『伊藤大輔 生誕百年映画祭』開催

宇和島市出身で「時代劇映画のパイオニア」として知られる伊藤大輔監督の生誕百年を記念した映画祭が、郷土の映画愛好家らの手で企画されました。

■上映作品 「忠次旅日記」、「下郎の首」

■日時・場所 平成10年11月15日(日) 13:00~17:00
南予文化会館(宇和島市主催)



◀忠次旅日記
(大河内伝次郎主演)
当日は、わか こうじ氏の
活弁入り



★入場無料、伊藤監督の遺品展 同時開催

■問い合わせ先 ☎0895-22-3557 (映画祭実行委員会 田部司委員長)

★えひめ地域づくり研究会議からのお知らせコーナー

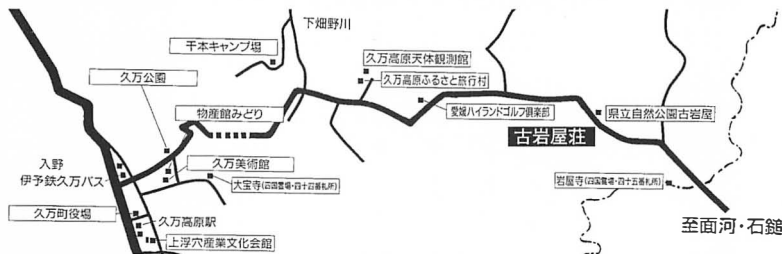
『四国へんろ道文化』を考えるミニ集会 開催

■日時・場所 平成10年10月31日(土) 15:00~18:00
国民宿舎 古岩屋荘(久万町)

★集会は参加無料、集会后 交流会(参加費:5,000円)、宿泊希望者(+6,000円)

★翌日午前中、岩屋寺までの「へんろ道ウォーク」あり

■申込み 10月20日(火)までに、研究会議事務局(☎089-932-7750 檜垣)へ



BOOK INFORMATION

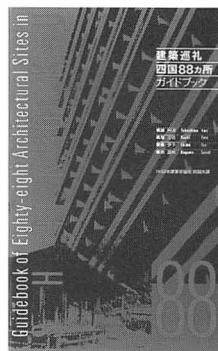
●雲湧く村ー惣川・土居家
犬伏武彦 著・監修
アトラス出版
(☎ 089-974-3947)
B5版 1,905円(税別)

20年近く前、高知県境に近い山奥で、巨大な茅葺き民家に出会い、170年目の修復に関わった著者が、その軌跡を地域の人々の声と惣川の美しい風景をおりまぜながら紹介。



●建築巡礼四国88カ所
(社)日本建築家協会
四国支部 編集・発行
(☎ 087-844-1072)
A4変形版 1,000円(税込)

四国霊場88ヶ所巡りにちなんで、四国4県の明治以降の建築の中から、訪れる人々に感動を与えてくれる88の作品を選考し、カラー写真とともに紹介したガイドブック。



☆まちセンからのお知らせ

「しまなみ海道地域ミニフォーラム」開催

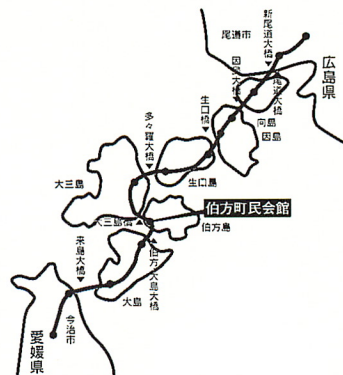
来年春に予定されている「瀬戸内しまなみ海道」(本四架橋尾道～今治ルート)の開通により、地域の人々の暮らしがどのように変わるか、そして、これからの地域づくりをどう進めていくべきかなどを、しまなみ海道地域の民間及び行政のまちづくり関係者が一堂に会し、出席者全員で徹底的に討論するミニフォーラム(40名程度参集予定)を開催します。

■と き 平成10年11月5日(木) 13:30～17:00

■と ころ 伯方町民会館2階大会議室

■アドバイザー 森 戸 哲 地域総合研究所長
若 松 進 一 えひめ地域づくり研究会代表運営委員

■問い合わせ ☎089-932-7750 (担当:藤田)



「21世紀のえひめのむらづくりを考えるシンポジウム」共催

テーマ「田舎暮らしを楽しむーブームからストリームへー」

21世紀えひめ村づくり推進協会主催のシンポジウムの企画を、当まちづくり総合センターでお手伝いしました。

■と き 平成10年11月12日(木) 13:00～17:00

■と ころ にぎたつ会館(松山市道後姫塚)

■プログラム ○基調講演「田舎暮らしブームと多自然居住地域」〈仮題〉
講 師 宮 口 侗 迪 (早稲田大学教育学部教授)

○パネルトーク

コーディネーター 泉 英 二 (愛媛大学農学部教授)
パネラー 西 川 則 孝 (丹原町 ちろりん農園)
上 田 道 子 (内子町 百楽園)
山 本 光 男 (日 吉 村 長)

■申 込 み 10月30日(金)までに、21世紀えひめ村づくり推進協会(☎089-943-2800)へ

印刷/三創印刷株式会社

発行/平成十年十月十五日
(財)愛媛県まちづくり
総合センター

〒790-0003
松山市三番町八丁目三三四
愛媛県生活保健ビル三階
(財)愛媛県まちづくり総合センター
TEL089-(932) 7750
FAX089-(932) 7760

内容についてのご意見やま
ちづくり活動のトピックなどあり
ましたら、お気軽に『舞たうん』
編集係までお寄せください。

年中で最も快適なシーズンを
迎えました。芸術、スポーツ、
読書、収穫、そして食欲の
秋・・・夏に続いて秋祭り等の
イベントも、数多く開催されま
す。
秋の夜長に縁側で、虫の声と
月の光を浴びながら、盃を片手
に、皆さん一杯いかがですか?
されど、食べ過ぎ呑み過ぎに
は、重々ご留意を・・・

(小)